

Miyagi

# まちづくりと 地域支え合い



## CONTENTS

- 2 **MIYAGIの今 35 七ヶ宿町**  
町外からの転入者目線で地域に入る
- 3 **MIYAGIの今 36 色麻町**  
包括・社協のコーディネーターが連携
- 4 **インタビュー 女川町社会福祉協議会 住吉いづみさん**  
「お宝」を発表する地域自慢大賞を運営
- 5 **インタビュー 鳴子まちづくり協議会 高橋章浩さん**  
お宝探しと見える化の繰り返しから
- 6 **生活支援コーディネーターの活動と工夫 活動記録様式編**  
石巻市・愛知県一宮市
- 7 **生活支援コーディネーターの活動と工夫 コーディネーター同士のつながり編**  
仙台市太白区・仙塩地区3市3町
- 8 **宮城県生活支援コーディネーター養成研修紙上再録**  
お宝の「見える化」に取り組む

女川町で開催された「地域自慢大賞」では、参加者投票により、竹浦獅子振り保存会が大賞を受賞（詳しくは本紙4頁へ）

宮城県内外の生活支援コーディネーターおよび協議体の取り組みを発信しながら、住民や専門職・関係機関の意識を高め、最後まで住み慣れた地域で暮らし続ける社会づくりを目指します。

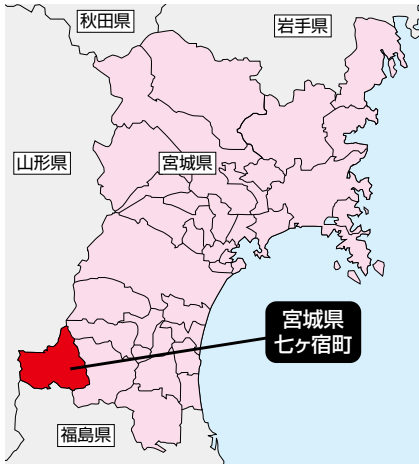
vol.19  
2018.11



# の今

35

## 七ヶ宿町



### DATA

#### 七ヶ宿町

人口	1,406人 (2018年10月1日時点)
高齢化率	46.0%
新しい介護予防・日常生活支援総合事業への移行	2017年4月
生活支援体制整備事業の実施	2018年4月

七ヶ宿町では、町社会福祉協議会に2018年4月より第1層生活支援コーディネーターを配置しています。生活支援コーディネーターを務めるのは、今春に県外から同町へ転入してきた、看護師資格をもつ植草映奈さん。この町での生活も、福祉

# 町外からの転入者目線で地域に入る

系の職に就くのも初めてですが、町社協のほかの事業の担当職員に同行して地域に足を運ぶことで、地域住民と出会い、福祉に関する理解を深めてきました。

植草さんは、「自分と同じ町に暮らす先輩方からいろいろ教えていただく」という姿勢で、地域住民とのコミュニケーションを育み始めました。まずは新しい町民、新しい社協職員として、町社協が携わるサロンの場などで、団体代表者や民生・児童委員などに挨拶をし、顔を覚えてもらいました。10月からは民生・児童委員、ケアマネジャー、シルバール人材センター職員と相談して選んだ65歳以上の人が住む世帯への訪問を開始。

植草さんの自己紹介とあいさつ文を記載したチラシを配付しておき、後日訪れます。滞在時間を定めず、相手の都合に合わせて話を伺い、お互いに会話を楽しみながら1〜2時間過ごすこともありま

す。個人の生活の様子を把握することに加え、気になる人を支援機関とつなげやすくするというねらいがあります。

町内での生活経験が浅くても、丁寧に住民と接する機会を設けることで、住民の地域での暮らし方や価値観が見えてきた植草さん。「すでにある支え合いの様子をまちの人たちと改めて共有し、より自信をもつて暮らしてもらいたい。そのため

にもまちの人たちと信頼関係を築いていきたい」と意気込みます。また、業務のなかで感じたことなどを植草さんが記録する業務日報は、町社協内や町役場の担当課内で回覧され、報告内容に対して「住民個人や人間関係などの情報にとらわれず、先入観のない公平な見方ができている」という評価を得ています。

以前から年1回開催している介護保険運営審議会を、今年度から第1層協議体として位置づけたほか、月1回の地域ケア会議も利用して、生活支援コーディネーターの取り組みなどを町内の医療・福祉関係者とも共有するようにしています。

町健康福祉課の参事兼課長補佐の小川真一さんは、「この事業をとおして、町社協の機能が強化されるとよいと思う。町から『これをしてもらいたい』と頼むのではなく、一緒に考えていきたい」と話し、町社協事務局長の今野誠さんは、「将来的には、ほかの事業とももっと連動させて、住民がその人らしく生活していくためのお手伝いをしていきたい。また職員が楽しみながら取り組むことをたいせつにしていきたい」と語ります。

哲



七ヶ宿町健康福祉課の参事兼課長補佐の小川真一さん(右)と七ヶ宿町社会福祉協議会の皆さん。(左から3番目が事務局長の今野誠さん、4番目が生活支援コーディネーターの植草映奈さん)



訪問先へ事前に投函するはがきサイズの手紙と、自己紹介チラシ





# の今

36

## 色麻町

DATA	
色麻町	
人口	6,976人 (2018年4月1日時点)
高齢化率	31.7%
新しい介護予防・日常生活支援総合事業への移行	2017年4月
生活支援体制整備事業の実施	2016年4月

2016年度に第1層協議体を設置した色麻町は、18年4月、同町直営の色麻町地域包括支援センター（以下、包括）と色麻町社会福祉協議会に1人ずつ、計2人の第1層生活支援コーディネーターを配置しました。包括の佐藤香さんと町社協の金野佳奈子さんは、町保健福祉センターの同じ階に席があり、生活支援コーディネーターの着任を機に、より綿密な情報共有を図っています。着任以前からの担当業務と、生活支援コーディネーター業務は分断させず、生活支援コーディネーターとしての活動を、それまでの取り組みの延長

# 包括・社協のコーディネーターが連携

と位置付けて、住民の自主的な交流などの下支えに励みます。

2人は、互いの担当事業に同行しながら、集いの場などの取材を紹介する、「見える化」に力を注いでいます。

介護予防体操の集まりの写真を町保健福祉センターに掲示したり、社協だよりで住民による支え合いを紹介していきます。近隣の住民が集い、30年ほど前から支え合っているという高齢女性の自宅などへ取材に行くと、「この人もこのメンバーに入っていたんだ」「こんなお手伝いもしているんだ」という新たな発見が少なくありません。支え合



右から色麻町地域包括支援センター所長の高橋正彦さん、生活支援コーディネーターの佐藤香さん、金野佳奈子さん、包括次長の友友真澄さん

いや集いの場の様子を紹介することで、紹介された住民がよろこび、ほかの住民からも「私たちの活動も紹介して」などとうれしい要望が挙がります。

包括の次長の友友真澄さんは、「常に住民視点を持ち、地域の声を吸い上げてニーズを押し量りながら住民と接することが、自発性のあと押しになる」と話し、金野さんも「地域のお宝を見えるようにして、活動者のより大きなやりがいにつなげていきたい」と語ります。また、住民の暮らしぶりを写真などでまとめることで、ほかの関係職員なども、地域でたいせつにすべき住民同士のつながりを再認識したり、生活支援コーディネーターがふだんどこで何をしているのかを改めて理解することにもつながっています。



生活支援コーディネーター2人分の自己紹介チラシ

佐藤さんと金野さんは、互いの組織の事業についてこれまで把握していなかった部分にも目が届くようになり、「同じ住民を双方から同じように支援していたんだな」という気づきを得ました。さらに、「住民の方々は、包括と社協の区別がまま私たちに相談をされることもあるけれど、生活支援コーディネーター同士で確認すれば対応できるようにするし、連携していきたい」と佐藤さん。包括所長の高橋正彦さんも、「生活支援コーディネーターに、町内の各団体の連携のための橋渡し役になってもらい、支援が必要な人に対して効率的にサポートできるようにしたい」と期待を寄せています。

哲

## 「お宝」を発表する 地域自慢大賞を運営



地域自慢大賞にて、寸劇披露による活動発表



女川町社会福祉協議会  
生活支援コーディネーター  
住吉いづみさん

女川町社会福祉協議会は、「地域自慢大賞〜お宝のこいつば見でけらいん〜」を、2018年8月に開催しました。地域の「お宝」と言える集いや支え合いを実践している住民が、ほかの住民に向けて取り組みを紹介するもので、介護予防体操や伝統芸能などに取り組み4組の団体が出場し、持ち時間各20分間で発表。来場者からの投票により、大賞受賞者が選ばれました。本大賞の開催について、町社協に2人配置されている生活支援コーディネーターのうち、企画・運営の中心として活動した住吉いづみさんに聞きました。

——地域自慢大賞開催のきっかけは

「専門職が広報紙などで住民活動を紹介するような、外からの発信ばかりではなく、住民の皆さんが自分の力で発表する機会が必要だと考えました。活動の価値や、それをほかの人に紹介する力もっていることを自覚したり、住民同士で刺激を受けて、地域が活性化されると思いたし、地域福祉の推進に必要なのは住民の力であると、住民の皆さんに気づいてもらいたかったんです。そして、気さくで楽しい場にしたいと

『地域自慢大賞』という名前にしました。親しみやすい文言を入れようと、女川弁で、『私のこの活動を見てよ』という意味合いの、すつと入っていくような副題をつけました」

——出場団体の決め方は

「町内の全区長に企画のお知らせをして、広報紙でも周知して、参加者を募集しました。そして、住民さんに直接『ふだんの活動を自慢し合いませんか』とお誘いしました。当初、住民の皆さんは、『自分たちの取り組みは発表するほどのことではない』という意識が強かったのですが、話すなかで、日々の集いなどの価値を再認識してもらえました」

——発表準備のサポートの仕方は

「日頃、私が住民の皆さんの活動風景を撮影しているので、発表に使う写真を用意したりもしましたが、話す内容は住民で決めました。あとは、ふだんやっていることを基に、劇や体操などを披露してもらいました」

——発表後の投票なども盛り上がっていました

「来場者の皆さんから『すごい』と思う団体に投票してもらえば、最後まで楽しんでもらえると思いた。そこで、細かな評価基準は設け

ず、『好き』『応援したい』という素直な思いのままに、子どもからも1人1票入れてもらいました。審査委員長を、第一層協議体の委員でもある女川温泉ゆづりの支配人に務めてもらい、励ましとなる講評もいただきました」

——地域住民の反応・変化は

「出場した皆さんは、『出てよかった』と、ますます元気になりましたし、ほかの活動発表の場に呼ばれるようになった団体もあります。大賞を受賞した竹浦獅子振り保存会は、『こんなにうれしいことはない』と賞状を集会所に飾ってくれていて、お祝い会に私も呼んでもらえることになっていきます。さまざまなかから『第2回もあるんだよね?』と聞かれますし、出場していない人にも、『自分の地区で発表できるものがあるかな』と話してもらえて、響いたものがあつたのだと感じています。日常的な活動をほかの人に知ってもらうだけでなく、こんなにも力が大きくなるんですね。改めて、住民の力はすごいなと感じました」



# お宝探しと 見える化の繰り返しから

鳴子まちづくり協議会  
第2層地域支援(生活支援)コーディネーター  
高橋章浩さん



JAIわでやまの移動販売  
(購買店舗併設型金融移動店舗)



第2層地域支援コーディネーターの高橋章浩さん(左)と  
第1層地域支援コーディネーターの中鉢慶太さん

大崎市では、「生活支援体制整備事業」と地域自治組織の組織体制強化と地域の特性やニーズに即した事業の仕組みづくりを目指す「地域自治組織戦略体制整備モデル事業」を、2016年度より実施。それにあわせて、生活支援コーディネーター機能を併せもつ「地域支援コーディネーター」を配置しました。第1層コーディネーターを市職員が担い、日常生活圏域の第2層コーディネーターを「鳴子まちづくり協議会」などの地域自治組織6団体(2018年11月現在)に配置しています。

鳴子温泉地域では、市内で2番目に早く地域支援コーディネーターが配置され、高橋章浩さんと2018年度から採用となった池田有紀さんの2人が務めます。高橋さんにお話を聞きました。

——両事業の委託を受けて、協議会としてどう地域に働きかけを

「年々進む高齢化に加えて、唯一のスーパーマーケットが2015年に撤退し、買いたいもの困難者の対策が地域の課題でした。協議会では、31の行政区のうち上野々・上鳴子の2地区をモデル地域とし、買いたいもの対策の話し合いから始めました。モデル地域とその周辺地域の住民、行政によ

るワークショップを両地区で各1回開催しました」

——ワークショップの成果とは

「地域課題や行政への要望が出る一方で、観光名所や伝統行事、住民の助け合いなどの地域資源やお宝が数多く出ました。自分たちで考えて情報を集めて話をしたことで、お宝が意識化される機会にもなったのでは。上野々地区では、ワークショップ後も、地区役員への報告を経て、住民だけで話し合いの場がもたれました。さらに、ワークショップで要望があり、JAIわでやまの移動販売(購買店舗併設型金融移動店舗)の誘致が決まりました。移動販売の訪問にあわせて、住民による週1回の介護予防体操も始まり、体操の参加者での見守り合い、移動販売の買いたいもの客同士でのおすそ分けも生まれました。住民が自ら話し合い、行動して、活動が広がっているのが一番の成果だと思っています」

——コーディネーターとしての地域への入り方は

「市社協の事業のサロンなどを入口に、地域に入ります。カメラを手に『写真を撮らせてください』とお茶飲みに交えてもらいます。それを繰り返して信頼関係を築いていきます」

——地域に入っの発見とは  
「仲間内に向けて授業を開く90歳

代の元学校の先生や、住民の見守りにも派生するグラウンドゴルフなど、長年続くお宝がたくさんあると気づきました。決して便利な地域ではないけれど、だからこそ昔から人とのつながりが強い。それこそがお宝で、それを皆で意識して大事にすることが、地域課題を解決する鍵でもあります」

——お宝や体制整備をどう住民に伝えていくか

「伝えることの難しさも多々感じますが、協議会と同じ棟にある大崎市鳴子総合支所の地域振興課や第1層コーディネーターに相談し、協力を得て進めています。説明会なり広報紙なりで『見える化』して、住民、特に世話係など、地区のキーマンに少しずつ伝えていくことが近道。それが生活支援体制整備事業のスタートでもあると思います。お宝の発見から冊子づくりや説明会、発表会の開催に至る過程を何度も繰り返すことがたいせつで、その前後の話し合いが協議体につながっていくと思います」

——今後について

「今年度は、12月6日の地域支え合い住民向け研修会とお宝冊子づくりを計画。来年度には、お宝発表会の開催も考えています」

# 生活支援 コーディネーターの 活動と工夫

皆さんは、生活支援コーディネーターとしての活動を、どのように記録されていますか？

暮らしのなかにある支え合いを見つけ、つないでいくという役割を、記録を通して同僚や上司、関係機関と共有・活用している2つの取り組みをご紹介します。

## 活動記録様式編

### 地域への働きかけや考え方を 重点的に記録する

石巻市社会福祉協議会

石巻市は、第1層、第2層の生活支援コーディネーターを市社会福祉協議会に配置し、東日本大震災の被災者支援にも力を入れている地域福祉コーディネーター13人が、第2層生活支援コーディネーターを兼務しています。2つのコーディネーターの業務内容に境界線を設けず、日々の業務を記録した日報をもとに毎月の報告書を作成し、市担当課へ提出しています。また、報告書を用いて行われる月次ミーティングでは、市担当課や県社会福祉協議会の職員が出席し、共有や課題の整理を行っています。

【総括】欄に、1か月間の業務をとおして、学びや気づき、視点や考え方などを記入。サロン活動の支援、そこから住民同士の見守り活動への展開を支援したものについては【地域調整】欄に記録し、住民団体であっても支援者間として情報共有した際には【連携】欄に記録。【特記その他】欄には、老人クラブや民生・児童委員協議会の行事、外部での研修に参加したことなどを記載します。「記録を通じて、各コーディネーターが地域の役に立つプロとしての本質的な力や応用力を育むように工夫している」と、同市社協地域福祉課課長補佐の阿部由紀さんは語ります。

住民との会話や、住民による気づきをもとに、コーディネーターがどうかかわってほしいと考えているかを簡潔に共有することで、取り組み方の方向性を固めること、また連携機関からの有効な助言・協力を得ることに役立ちます。ひいては、コーディネーターが日常的に地域に出て、住民とかかわるなかで果たす役割を示すことにつながっています。

哲

### 暮らしぶりを見る生活支援コーディネーターの視点を記録に残す

愛知県一宮市

日付	場所	出席者	項目	内容	留意・おもしろ課題
平成28年4月21日(木)	一宮市商工会議所	商工会議所、〇〇商事、包括2人	買い物支援	電話および訪問。移動販売の展開希望があるため、商工会議所としての展開予定やアドバイスを行う。	商工会議所は、事業者を支援する視点で買い物支援を求め、包括は買い物支援を支援する視点で事業者を支援する点で両者の視点を合わせている。両者の視点が異なるため、両方をききとらえ、すり合わせていく必要がある。まずは地域の協力が必須である。
平成28年4月28日(木)	〇〇出張所へ依頼	包括	買い物支援	〇〇町内会長へ、買い物支援に関するアンケートを依頼	町内会長にアンケートをしたが、買い物支援への認識が薄い状態であった。また、1年間の経緯であるため、買い物支援の現状を把握して、町内会長として今後の協力のために活動しようという意識が強いような回答がなかった。まずは少数であるが、協力可能と回答した町内会長から働きかけをしよう必要がある。
平成28年6月24日(金) 10時~11時45分	老人保健施設会議室	〇〇町地域づくり協議会長、〇〇町地区長、〇〇町内会長、〇〇町民生委員、一宮市社協、一宮市、包括3人	買い物支援	地域包括ケア会議	〇〇町内での買い物支援について、実施したアンケートをもとに包括と連携について話し合った。包括が定着する機会を捉えることもよいという積極的な意見も存在するが、町内会の理解が得られないと連携に機能しないことなどを説明。アンケートの回答内容とは異なり町内の買い物支援が比較的多いと思われ、別の町内会の現状把握に課題が浮き上がった。
平成28年8月16日(火) 13時30分~14時30分	老人保健施設会議室	一宮市商工会議所、包括(2人)	買い物支援	買い物支援への対応の情報収集と今後の買い物支援の検討	包括で行った地域包括ケア会議での〇〇地域の買い物支援の社会資源について、アンケートの回答もあわせて検討することから、ユーザが少ないゆえ時間短縮という結果になった。今後は、民間事業者による無償提供での地域資源を活用し、移動販売事業者等による「おでかけ応援」の申請を商工会議所から呼びかけることを提案。包括としては、「おでかけ応援」の認定の情報提供と活用を地域包括に呼びかけていく。
平成28年9月26日(月) 14時~11時	カフェ〇〇	一般住民、〇〇商事、包括(3人)	サロン	地域コーゼンブレックfastの開催	「健康病を知って予防しよう」という内容で教育を開催。〇〇地区において若い高齢者も参加された。すでに健康情報の提供を受けたい参加者も見え、病気の発生、運動などの知識向上をはかった。また、今年度の市の地域包括ケアセンターに関する意見もいただいた。意見集約して地域包括ケアセンターの開催の開催の計画も進めたいことを目標として、コーゼンブレック開催後、健康の移動販売業者と販売店業者との紹介を行い、包括からも訪問し、おたけ広場登録の許可を得る。

1つの地区について、時系列に記すスタイル

愛知県一宮市は、2015年度に生活支援体制整備事業を開始、市社会福祉協議会に第1層生活支援コーディネーターを委託、2016年度に地域包括支援センターに第2層生活支援コーディネーターを委託しています。

当初から「記録は、生活支援コーディネーターが書きやすい方法を考えてきた」と一宮市高年福祉課の飯田雅信さん。担当職員が出席した会議や集まり、対応した案件など、すべての業務の報告を求めています。それは今までの業務をただなぞらえるのではなく、そこに「生活支援コーディネーターの視点で気づいたことを書いてもらっている」と言います。

「聞き取りは、調査やヒアリングではありません。何気ない会話から暮らしを聞き、見つけたものを文字化することで。私たちはその報告を読み込み、生活(暮らし)には何が大事なのかという視点で指導をしています」と話すのは、同



一宮市役所の飯田雅信さん(左)と新川理映さん

課保健師の新川理映さん。「生活支援コーディネーターと『暮らしぶりを見る』という根本理念を綿密にしています」と力強く話してくれました。

絵



# 生活支援 コーディネーターの 活動と工夫

## コーディネーター同士のつながり編

生活支援コーディネーターは新しい職種のため、役割や活動、周囲の理解など、当事者ならではの悩みがたくさん！そこでコーディネーター同士がつながって意見交換をしている県内2事例をご紹介します。どちらも、自由に意見交換できるのがポイントのようですね。

### 地域包括支援センターと 社会福祉協議会の連携の場にも

#### 仙台市太白区地域包括支援センター機能強化専任職員部会

仙台市太白区では、地域包括支援センター（以下包括）の機能強化専任職員（生活支援コーディネーターと認知症地域支援推進員等を兼ねる）と仙台市社会福祉協議会太白区事務所職員、太白区職員が月1回、「仙台市太白区地域包括支援センター機能強化専任職員部会」を開いています。

テーマと議事は事前に決めてありますが、違う話題が出ることも多く、自由な意見交換の場になっています。話題はネットワークづくりに限らず、個別支援にも及びます。たとえば、「65歳未満の住民の孤独死がおきた。民生委員が責任を感じてしまっているが、対応するのも難しい」という話を受けて、「新聞販売店やヤクルト販売店に身守りをしてもらっている」「居宅介護事業所に情報提供を求めている」「どこかで誰かとつながるのが大事」と地区ごとの対応や意見を共有しています。

機能強化専任職員が区内の包括に配置され始めたのが2015年4月。「模索しながら始めた」「自分の役割が曖昧」といった不安感を軽減したいと、2016年5月から区内全12の包括職員で部会を始めました。

参加者からは、「同じ悩みを共有できる相手がいると安心。皆ががんばっているからがんばろうと思える」との声。今年着任したばかりの機能強化専任職員は、会議の場で先輩職員から助言を受けて、指針を得ているようです。参加者同士で日頃から連絡を取り合うこともあり、「互いの弱い部分を補い合っている」と感じています。「社協に相談できることが心強い」（包括職員）、「包括の思いを知ることができる貴重な機会」（社協職員）と機関の協働にもつながっています。

義



3年目を迎えた部会は、実践的な話題が増えました。最近では、認知症カフェの運営の仕方や生活支援のつくり方、圏域会議の話題が多く挙げられます

### あえて議事録は無し 近隣6市町で活動を共有

#### 仙塩地区3市3町生活支援コーディネーター情報交換会

隣接する塩竈市・多賀城市・東松島市・松島町・七ヶ浜町・利府町は、3か月に1回、「仙塩地区3市3町生活支援コーディネーター情報交換会」を各市町の持ち回りで開催。コーディネーターの情報共有と孤立予防を目的としており、毎回各コーディネーターが活動報告をしています。制約なく話せるように、議事録を設けず、方向性を固めていません。

今年10月の情報交換会では、高齢者運転の講話と協議体代表による周知活動を組み合わせて行う塩竈市、共生社会をテーマにしたお宝発表会を予定する多賀城市、町民合同研修会を企画する松島町、今年9月に配置した第1層コーディネーターの育成に力を入れる利府町など、自治体ごとの特色あるアプローチを共有し、学びを深めました。「コーディネーターのたいへんさが同僚や上司に伝わりづらい」「一日の報告をして周囲を巻き込んで」と相談・助言し合う場面も。アドバイザー参加をしている宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議事務局の及川一之さん（宮城県社協）に、生活支援体制整備事業の今後の方向性を尋ねる人もいました。



今年10月の会では初参加の塩竈市浦戸地区の報告を受けて、次回開催地を浦戸に即決。「チームでどこかに行くのは良いこと。県社協としてつなぎ役のお手伝いもします」とアドバイザーの及川さんも応援

会の始まりは昨年度、多賀城市東部地域包括支援センターの安住智幸さんと七ヶ浜町社協の鈴木優さん、利府町社協の田中隆輔さんが、大和町の「おらほのお宝発表会」に向けた住民研修（宮城県生活支援コーディネーター養成研修・応用講座8）に参加したこと。連携について話すうち、2017年10月に1回目の交換会開催に至りました。

参加者は「前例がないなかで、他市町のやり方が参考になる。活動記録を見せ合うこともある」「高め合う機会にできれば」と会の意義を話します。

義

# お宝の『見える化』に取り組む

宮城県  
生活支援  
コーディネーター  
養成研修紙上再録

2018年10月2日、県自治会館（仙台市青葉区）で生活支援コーディネーター養成研修の実践講座1-2が開かれ、生活支援コーディネーターや生活支援体制整備事業の担当者など計40人が参加しました。講座のテーマは、**地域のお宝をいかに見える化し、広く伝えて地域づくりにつなげるか。**講師の一人、**福島県金山町**の生活支援コーディネーター・**五十島寿子**さんが、**見える化の実践報告**をしてくださいました。



生活支援コーディネーター  
五十島寿子さん

金山町は会津地方の山間に位置。古くから農林業が盛んで、近年は赤カボチャの栽培で知られます。豊富な温泉でも有名。人口2092人、高齢化率は59.6%です（2018年9月1日時点）。

生活支援体制整備は16年6月、町社会福祉協議会が第1層生活支援コーディネーターとして福祉活動専門員の五十島寿子さんを選任し、本格始動しました。

町、町社協、そして五十島さんは、高齢者の暮らしに根づく畑仕事、野菜・手料理などのおすそ分け、家を行き来してのお茶飲み、近所付き合いのなかでちょっとした困りごとに対処する生活文化を「地域のお宝」とし、体制整備に生かす考えで一致。お宝の掘り起こしと見える化を生活支援コーディネーターの業務の柱に据えました。

見える化は、三つの手法を組み合わせて進めています。

第一に、お宝の当事者に対する見える化。お茶飲みやおすそ分けが行われている日常の暮らしの場に五十島さんが入り、住民に「お茶飲みの仲間がいるから、高齢でもひとり暮らしでも安心して生活できますね」などと伝えます。それによって、お宝の当事者にその意義や価値に気づいてもらうのです。

第二に、町の広報紙「広報かねやま」の活用。広紙報の16年9月号でまず五十島さんを紹介する記事を、17年5月号でお宝の特集記事を掲載。続いて同年6月号から個々のお宝の紹介記事を連載しています。一連の記事でお宝とは何かを具体的に示し、お宝を守り、受け継いでいく機運の醸成を図ります。記事はまた、五十島さんの仕事を住民をはじめ町の担当者や町社協のほかの職員らに伝えるものでもあります。

第三に、お宝発表会の開催。町社協は毎年「福祉のつどい」と銘打った福祉功労者の表彰などを行うイベントを開いています。これに併催する形で17年12月、第1回の地域のお宝に関する「ミニサミット」を開きました。ミニサミットでは、五十島さんが「金山町のお宝 お茶飲み場から見えてくるつながりと支え合い」と題し、動画や写真でいくつかのお宝をプレゼン。会場に招いた当事者にその場でインタビューもしました。参加した長谷川盛雄町長（当時）は、お宝について「住民が自分たちの健康と地域を守っていきこうとする姿勢が町を支えている。本当に心強い」と絶賛。住民の一人も、「地域で暮らし続けるのに何が必要

か考えさせられた」と述べています。

五十島さんはさらに、地域のサロンなどでミニミニサミットを開きます。お宝のプレゼンをして、参加者に「皆さんの周りにもあるでしょう」と問いかけます。お宝に対する住民の理解を深めつつ、新たなお宝の掘り起こしにつなげます。

一連の取り組みによって、お茶飲みや地域のサロン、福祉のつどいといった既存の住民の集まりは、「お宝を生かす地域づくり」を話し合う協議の場にもなります。

お宝の見える化・見せる化は、高齢になっても暮らしやすい地域のあり方を、住民主体で話し合う重要なステップなのです。

利



見える化の一つとして、講座では動画の撮影も演習しました